150.

612.122:612.41

# **脾臓ノ含水炭素新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テ** (實 驗 的 研 究)

岡山醫科大學石山外科教室(主任石山教授)

# 藤井昌展

(昭和10年2月25日受稿)

Aus der I. Chirurgischen Klinik der Okayama Medizinischen Fakultät (Vorstand: Prof. Dr. F. Ishiyama).

# Über den Einfluss der Milz auf den Kohlenhydratstoflwechsel. (Ein experimenteller Versuch.)

Von

#### Masanobu Fujii.

Eingegangen am 25. Februar 1935.

Das Verhältnis der Milz zum Kohlenhydratstoffwechsel ist bisher zwar von vielen Forschern untersucht und ziemlich geklärt worden; man findet aber, wenn man jedes einzelne Versuchsresultat genau betrachtet, widersprechendes unter denjenigen Resultaten, die man unter denselben Versuchsbedingungen erreicht, und dazu herrscht noch eine Unklarheit darüber Bestandteil des Hormons der Milz auf den Kohlenhydratstoffwechsel einwirkt. Infolgedessen stellte ich mit gesunden Hunden verschiedenartige Experimente an, um obenerwähnte Probleme zu lösen, und kam zu folgenden Ergebnissen.

1) Milzexstirpation. Dabei senkt sich die nach der Injektion des Traubenzuckers erscheinende Hyperglykämie langsam.

Das Leberglykogen vermindert sich mehr als bei einer Kontrolle, aber des Muskelglykogen zeigt gegenüber einer Kontrolle keinen Unterschied. Der histologische Befund stimmt mit durch chemische Mittel erreichten Versuchsresultaten überein.

2) Injektion von Milzextrakt. Dabei wird die Senkung dieser Hyperglykämie gefördert. Das Leberglykogen vermehrt sich gegenüber einer Kontrolle, doch erfährt das Muskelglykogen keine quantitative Veränderung. Der histologische Befund stimmt mit durch chemische Mittel erreichten Versuchsresultaten überein.

3) Injektion von Cholin. Dabei wird die Senkung dieser Hyperglykämie gefödert. Das Leberglykogen vermehrt sich gegenüber einer Kontrolle, aber das Muskelglykogen zeigt gegenüber einer Kontrolle keinen Unterschied. Der histologische Befund stimmt mit durch chemische Mittel erreichten Versuchsresultaten überein.

4) In Milzextrakt ist eine cholinartige Substanz enthalten, welche auf den Kohlenhydratstoffwechsel fördernd einwirkt. (Autoreferat.)

# 內容目次

第1章 緒 論

第2章 脾臟剔出ノ葡萄糖靜脉內注入後ノ血糖 量,肝臟並ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第1節 緒 言

第2節 實驗材料及ビ實驗方法

第3節 實驗成績

A. 血糖量ニ及ボス影響

B. 肝臓並ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第4節 肝臓並ニ筋肉ノ組織學的所見

第5節 本章ノ機哲

第3章 脾臟越幾斯ノ葡萄糖靜脉內注入**後**ノ血糖 量,肝臟並ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第1節 緒 言

第2節 實驗材料及ピ實驗方法

第3節 實驗成績

A. 血糖量 = 及ボス影響

B. 肝臓竝ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第4節 肝臓並ニ筋肉ノ組織學的所見

第5節 本章ノ概括

第4章 脾臟ニ存在スル迷走神經刺戟素ニ就テ

第1節緒言

第2節 實驗方法

第3節 本章ノ概括並ニ考察

第5章 鹽酸「ヒヨリン」ノ葡萄糖靜脉内注入後ノ

過血糖,肝臓並ニ筋肉糖原質量ニ及ボス 影響

第1節緒言

第2節 實驗材料及ピ實驗方法

第3節 實驗成績

A. 血糖量ニ及ボス影響

B. 肝臓並ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第4節 肝臓並ニ筋肉ノ組織學的所見

第5節 本章ノ概括

第6章 總括及ビ考案

第7章 結 論

主要文獻

#### 第1章 緒論

牌職が諸種新陳代謝ニ對シ重要ナル關係ヲ 有スル臓器タル事ハ, 幾多先人ノ業績ニョリ 明白ナリ.

脾臓ト含水炭素新陳代謝トノ關係ハTogawa 氏(1920)ガ,脾臓ハ含水炭素新陳代謝ニ關與 スル内分泌的機能ラ有ス臓器ナリトシ,葡萄 糖液ノ靜脉內注入ラナシタルニ,剔脾家兎ハ 正常家鬼ニ比シ注射後ノ過血糖强度ニシテ且 持續時間ノ長時ニ亙ルヲ觀察シ,又脾臟越幾 斯ノ皮下注射ニョリ輕度ノ過血糖ノ招來スル ヲ實驗報告セシ以來, 此方面ニ於ケル業績相 次デ發表セラルルニ至レリ.

Montemartini 氏(1929) 及ビ Mard 氏(930) ハ脾臓ヲ剔出スルモ血糖ノ變化ナシトナセシ モ, 野間(1926), 小室(1925), 宮村, 徳田, 藤原 (1932), Bierry (1924), Rothery 及ビ Levina (1924), Marino (1926) 等諸氏ハ脾 臓剔出ニ據リ血糖ノ上昇ヲ來シ葡萄糖ノ同化 作用ハ正常動物ニ比シ低下ヲ來スヲ報ゼリ. Quarta 氏 (1927) ハ犬ニテ諸種ノ糖類ノ投與 後糖尿ヲ測定シ,脾臟剔出後,糖「トレラン ツ」ノ減退ヲ證明セリ. Bouisset 氏, Rouzaud 氏及ビ Soula 氏 (1930) 等ハ、 家東ニテ牌臓 越幾斯注射ニョリ過血糖並ニ屢々糖尿ノ惹起 スルヲ認メタルモ犬ニテハ何等作用ナシトセ リ. Mark 氏 (1930) ハ脾臓 / 經口的投與ニョ リ血糖ノ低下ヲ來スヲ報ジ, Marx 氏 (1930) ハ脾臓剔出後ノ糖「トレランツ」ノ低下ハ脾 臓越幾斯ノ經口的投與ニヨリ正常トナリ得ト 稱シ, E. Flaum 氏及ビ A. Schlesinger 氏 (1933) ハ白色鼠ニテ 剔脾後ハ 糖「トレラン ツ」ノ減退ヲ來スモ,2匹ノ白色鼠ニ施行セル Parabioseversuche ニ於テ1匹ノ脾臟剔出ヲ ナスモ,他ノ1匹ノ殘留セル脾臓ノ代償的機 能ニョリ正常ノ含水炭素新陳代謝ヲ營モ得ル ヲ證明セリ.

牌職ト膵臓トノ内分泌機能ニ關シテハ, Massaglia 氏(1930)ハ膵臓ノ部分的剔出ニョ リ惹起セル軽症糖尿病犬ニテ脾臓剔出ニョリ 更ニ増悪スルヲ報ジ、Marx 氏ハ脾臓越幾斯 ハ糖尿病患者ノ食餌性過血糖ヲ著明ニ抑制ス ル作用アリトナシ、小室氏(1930)ハ家兎ニテ 脾臓剔出ニョリ「インシュリン」血糖低下作用 ハ抑制セラレ「アドレナリン」過血糖ハ促進サ ルルヲ證明セリ.

上述ノ如ク脾臓ノ含水炭素新陳代謝ニ及ボス影響ニ就テハ諸氏ノ實驗報告ニョリ犬ニ閥明セラレタル觀アリ.然レドモ融ツテ個セノ實驗成績ニ就キ點檢スル時ハ殆ド同一ナル要約ノ許ニ施行セラレタル實驗ニシテ尚ホ相反スル成績アリ.且又脾臓ノ如何ナル「ホルモン」様物質が糖代謝ニ影響ヲ及ボスヤノ問題ハ,其ノ實驗報告少ク未ダ不明ノ點多々アリ.之余が恩師石山教授御指導ノ許ニ本研究ヲ企テタル所以ニシテ幾多實驗ヲ重ネタル結果故ニ多少見ルベキ成績ニ到着セリト信ズルヲ以テ之ヲ報告シ諸賢ノ御批判ヲ仰ガントス.

# 第2章 脾臟剔出ノ葡萄糖靜脉內注 入後ノ血糖量,肝臟竝二筋 肉糖原質量二及ボス影響

# 第1節 総言

牌職剔出後ノ血糖=闘シ, Bierry, Rothery et Levina 氏 (1924)等ハ, 犬ニテ牌臓剔出後血漿中ノ糖量ハ約 50% 増加スト述べ, 野間氏 (1926) ハ家兎ニテ剔脾後 5 日乃至 10 日間ハ術前ニ比シ稍々高ク, 其ノ後日ヲ經ルニ從ヒ漸次手術前ノ値ニ接近スルト稱シ, Dienerstein u. Geness 氏(1929), Gold u. Schnitzler 氏 (1926)等モ亦脾臓剔出後空腹時血糖ノ上 昇ヲ觀察セリ・脾臓剔出後野間氏ハ家兎ニ, Marino 氏ハ犬ニ,「アドレナリン」或ハ「インシユリン」ヲ注射シ血糖量ニ就テ檢索セルニ, Marino 氏ハ脾臓ヲ剔出スルモ「アドレナリン」過血糖ハ影響ナシトセシモ, 野間氏ハ「ア

ドレナリン」過血糖ノ曲線ハ剔呂前ノ夫レニ 比シ低ク徐々ニ最高ニ達シ又徐々ニ下降スル ヲ述べ、小室氏ハ脾臓剔出ニヨリ「アドレナ リン」過血糖ハ助長セラレ,「インシユリン」 ニョル血糖下降作用ハ抑制セラルハヲ報告セ リ、村尾氏 (1930) ハ家兎ニ「インシュリント 或ハ「アドレナリン」注射後肝臓糖原質量ヲ檢 セルニ,脾臓剔出ニョリ「インシュリン」ノ糖 原生成作用ハ抑制セラレ、「アドレナリン」ノ 作用ハ増强ヲ來シ肝臓糖原質ノ著明ノ減少ヲ 招來セリト述ベタリ. 山田氏(1931) ハ家鬼ニ テ脾臓剔出前後ニ於テ葡萄糖對 kg 0.75 g ヲ 靜脉内注入ナシ檢セルニ,脾臓ノ存在ハ過血 糖ノ消長ニ對シ何等影響ヲ及ボサザルモノノ 如シト稱セリ. 反之 Marino 氏ハ犬ニテ脾臓 剔出後、糖負荷ヲナシタルニ術前ニ比シ過血 糖曲線ノ程度强キヲ述べ,野間氏ハ剔脾家兎 ニ葡萄糖液注入ナセバ正常家兎ニ比較シ糖同 化機能ハ著明ニ障碍セラレ、過血糖曲線ハ高 ク且長時間=亙リ持續ス, 而シテ肝臓糖原質 ハ術後旬日間ニ於テハ正常家兎ニ比シ特ニ生 成糖原量ノ少キモノアリシモ概シテ其ノ差僅 少ニシテ,筋肉糖原質ハ脾臟ノ有無ニヨル影 響全ク認メ得ズト稱セリ.村尾氏(1930)ハ家 兎ニテ脾臓剔出後糖負荷ヲナス時ハ, 正常家 **鬼ニ比シ過血糖ハ其ノ程度强ク且長時間ニ瓦** リ糖注入ニョル肝臓内糖原質生成ノ減少ヲ來 スラ報告シ,藤原氏(1932)モ村尾氏ト同様ノ 成績ヲ得タリ. 卽チ文獻ニ就キ之ヲ見ルニ大 勢ハ剔脾後ニ於テハ糖同化機能ノ抑制ヲ肯定 セントスルガ如シ. 此見解果シテ正シキヤ否 ヤ余ハ次ノ如キ實驗ヲ行ヒタリ.

## 第2節 實驗材料及ビ實驗方法

試驗動物ハ生後1,2年前後ニテ體重 7kg 乃至11kg ノ正常犬ヲ使用シ、妊娠、出産後等ノモノハ總テ使用ヲ避ケタリ、購入後1週間以上一定ノ食餌ヲ與へ試験前日午後3時ヨリ紀食セシメタリ、正常犬ニ3日乃至5日ノ間隔ヲ置キ2回以上葡萄糖液ノ注入ヲナシ各大固有ノ血糖曲線ヲ決定シ、脾臟剔出前後ノ血糖量ノ消長ニ就キ比較研究セリ、

無水葡萄糖 (Merck 製) ハ 20% / 割合 = 蒸餾水 ニ溶解シ體重 1 kg = 對シ 5.0 cc ヲ後肢外側皮下靜 豚 = 50.0 cc ヲ 50 秒 ノ速度 = テ注入セリ・ 血糖測 定法ハ Hagedorn 及ビ Jensen 氏法ヲ用ヒタリ・

肝臓並ニ筋肉糖原質ノ測定ハ脾臓剔出後6日ニ 施行セリ. 準備トシテ剔牌犬ハ 40 時間内外絶食セ シメ食物ヨリ來ル影響ヲ可久的避ケタリ. 手術臺 ニ背位ニ固定シ、「ヌペルカイン」ノ局所麻醉ニテ 正中切開ヲ加へ腹腔ヲ開キ、肝臓右葉ノ邊緣ヨリ 楔狀 = 4.0 g 程切除シ 腹膜筋肉及ビ 皮膚 ノ縫合ヲ 行ヒ, 更ニ右後肢上部ニ切開ヲ加 へ四頭 股筋 約 4.0gヲ切除シ筋肉並ニ皮膚ノ縫合ヲ行ヒ, 次デ左 下肢ノ皮下靜脉ニ葡萄糖液ノ注入ヲナシ、注射後 束縛ヲ解キ艦内ニテ自由ニ生活セシメタリ、糖注 入後 90 分再ビ固定器ニ固定後, 開腹ヲナシ肝臓左 葉ョリ約4.0g左側四頭股筋ョリ約4.0gヲ切除セ リ. 肝臓及ど筋肉ヨリ切除セル4.0gノ内 3.0gハ 化學的定量ニ供シ、殘部ハ組織學的檢索ノ爲純酒 糖内ニ貯藏セリ. 糖原質測定法トシテハ岩崎, 毛 利氏敗良法ヲ用ヒテ糖原質ヲ葡萄糖ニ轉化セシメ 而シテ後 Bertrand 氏法ニョリテ葡萄糖ノ定量ヲ ナシ, 間接ニ肝臓並ニ筋肉糖原質量ヲ測定セリ.

肝臓及ど筋肉ヨリ切除セル組織片ハ出來得ル限 リ速ニ純酒精ニテ固定シ、後、「バラフイン」包埋 法ニテ切片ヲ作リ、「ヘマトキシリン」染色、Best 氏「カリウム、カルミン」染色法ヲ行ヒテ組織學的

#### ニ檢索セリ.

#### 脾臟剔出法

「モルフイン、スコポラミン」液(鹽酸「モルフイン」3.0g「スコポラミン」0.0005g ヲ水 100.0 cc = 溶解ス)對 kg 0.3 乃至 0.4 cc ニテ麻酔、固定器ニ固定後、腹部ノ刺毛ヲナシ沃度丁幾及ビ次亞硫酸酒精ニテ腹部ノ消毒ヲ嚴重ニ行ヒタリ、正中線ニ沿ヒ勝上部ニ長サ約7 cm 程ノ切開ヲ加へ、筋層並ニ

腹膜ヲ開キ左側腹腔内ニ示指及ビ中指ヲ挿入ナシ 脾臓ヲ腹腔外ニ索引シ、脾臓ニ出入スル總テノ血 管ノ結紮ヲ行ヒ、後、脾臓ヲ剔出シ腹膜筋層及ビ 皮膿ノ3 唇絲合ヲ行ヒタリ.

第3節 實驗成績

## A. 血糖量ニ及ポス影響

第 1 表

			子怎么		fa	X.	唐	Î	t (%)	)
例	性	體重 (kg)	手術後 日數	注射 接射前	15/	30 <b>′</b>	45′	60'	90'	120′
1		9.1	萷	0.092	0.251	0.229	0.118	0.100	0.090	0.099
1	ô	8.8	5	0.096	0.298	0.262	0.218	0.186	0.128	0.091
2	_	11.0	前	0.093	0.282	0.177	0.093	0.077	0.102	0.095
4	ð	10.5	5	0.099	0.340	0.233	0.170	0.134	0.100	0.099
3		10.6	前	0.081	0.124	0.166	0.090	0.079	0.078	0.081
3	δ	10.1	75	0.084	0.281	0.246	0.181	0.142	0.110	0.082
4		7.4	前	0.077	0.184	0.116	0.081	0.076	0.072	0.072
4	우	7.2	6	0.079	0.212	0.181	0.093	0.086	0.079	0.086
5	<b>*</b>	7.8	前	0.092	0.194	0.093	0.070	0.083	0.095	0.093
J	ð	7.6	6	0.088	0.201	0.183	0.145	0.115	0.076	0.071

第1例. 剔牌後ハ剔脾前ニ比シ過血糖ノ低下緩徐ナリ.糖注入後15分ヨリ過血糖ノ低下抑制ヲ認メ,剔脾前ニテハ90分ニ寡血糖ヲ示スモ,剔脾後ハ90分ニテハ尚ホ過血糖ヲ呈シ120分ニ寡血糖發來ス.

第2例. 糖注入後90分迄ハ剔脾後ハ剔脾 前ニ比シ過血糖ノ著明ナル低下抑制ヲ認ム. 剔脾 前ニテハ寡血糖60分ニ發來スルモ, 剔脾後ハ120 分ニテ尚ホ寡血糖ヲ認メズ.

第3例. 剔脾後ハ剔脾的ニ比シ過血糖ノ低下非常三級徐ナリ. 剔脾的ニ於テハ60分ニ寡血糖90分ニ最低血糖ヲ示スモ,剔脾後ハ60分,90分ニ

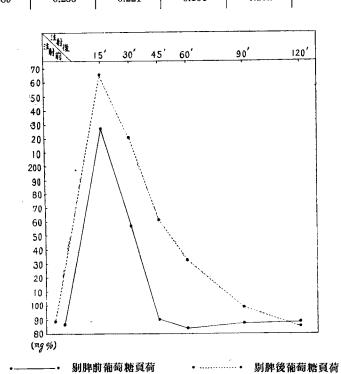
テハ伺ホ過血糖ヲ呈シ 120 分ニテ寡血糖發來ス.

第4例. 糖注入後90分迄ハ剔脾後ハ剔脾 前ニ比シ過血糖ノ低下抑制ヲ認ム.剔脾前ハ60分ニ寡血糖發來スルモ剔脾後ハ90分,120分ニテモ 尚ホ寡血糖ヲ認メズ.

第5例. 剔脾後ハ剔脾前ニ比シ30分,45分,60分ニテハ著明ナル過血糖ノ低下抑制ヲ認ム. 剔脾前ハ既ニ45分ニ寡血糖ヲ示スモ、剔脾後ハ45分,60分ニテハ尚ホ過血糖ヲ呈シ90分ニ於テ寡血糖ヲ認ム.

以上5例ノ剔脾前後ニ於デル糖頁荷前後ノ血糖 量ヲ平均スレバ次表ノ如シ.

		m	*	唐	量		
5 例平均	注射後 注射前	15′	30′	45′	60′	90′	120′
前	0.087	0.227	0.156	0 090	0.083	0.087	0.088
手術後	0.089	0.266	0.221	0.161	0.132	0.098	0.085



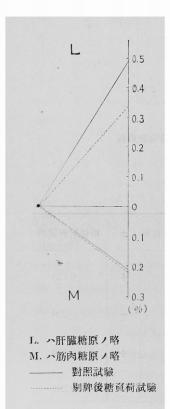
# B. 肝臓竝ニ筋肉糖原質量ニ及ボス影響

第 2 表

例	性	番號	體重 (kg)	肝臓重量 (g)	手術後日數			「グリコゲーン」含有率 (%)	±	糖注射前後差(%)
第 1 例	å	42 號	7.5	216.0	6	L. M.	直前 90′後 直前 90′後	1.542 1.770 0.653 0.427	+	0.228
第 2 例	ô	40 號	8.0	218.0	6	L. M.	直前 90′後 直前 90′後	0.697 0.950 0.695 0.493	+	0.253 - 0.202

例	性	番號	體重 (kg)	肝臟重量 (g)	手術後日數			「グリコゲーン」含有率 (%)	±	糖注入前後差(%)
第 3 例	8	39 號	9.1	215.0	6	L. M.	直前 90′後 直前 90′後	1.345 1.695 0.702 0.492	+	0.350
第 4 例	\$	28 號	9.5	315.0	6	I M.	直的 後 直 的 後	0.315 0.785 0.825 0.630	+	0.470
第 5 例	å	25 號	8.5	323.0	6	Г М.	直前 90'後 直前 90'後	0.235 0 612 0.584 0.350	+	0.377

L. ハ肝臓糖原質ノ略 M. ハ筋肉糖原質ノ略



表示スルガ如ク, 葡萄糖液注入前後ノ 肝臟糖原質含有率差 ハ、各例ヲ平均スレ パ 0.335% (増加)ト ナル、之ヲ手術ヲ行 ヘル對照試験(岡山 醫學會雜誌昭和9年 10月號参照) ノ肝臓 糖原質 平均 0.489 % (増加)=此スレバ明 カニ減少ヲ示ス. 筋 肉糖原質含有率差ハ 平均 0.213% (減少) ニシテ, 對照試驗 1筋肉糖原質平均 0.207%(減少)=比 シ大差無シ.

# 第4節 組織學的所見

第1例 (42號)

糖注入前・ 肝臓、肝細葉全般ニ亙リ多數ノ肝 細胞原形質内ニ於テ微細ナル「グリコゲーン」顆粒 ヲ中等數認ムルモ、星芒細胞、膣管上皮細胞、血 管内被細胞内ニテハ證明セズ・筋肉、筋繊維ノ横 斷面ニ就テ觀ルニ、筋漿ハ全般ニ淡紅色ヲ呈シ筋 繊維鞘直下ニ於テ濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ 認ム・

糖注入後. 肝臓. 糖注入前ニ比シ增量ヲ來ス. 肝細葉全般ニ亙リ肝細胞原形質内ニ稍々相大ナル 「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム. 筋肉, 糖注入前ニ比 シ減少ス. 筋繊維輔ノ直下偏在セル微細ナル「グ リコゲーン」顆粒ヲ認ム. 尚ホ筋漿全般ニ亙リ淡 紅色ヲ呈スル筋繊維散在ス.

第2例 (40號)

糖注入前. 肝臟,肝細葉ノ中心帶ニ於ケル中

等數ノ肝細胞原形質內ニ, 濃染セル稍々相大ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ中等數認ムパモ, 血管內被 細胞、星芒細胞, 應管上皮細胞內ニテハ證明セズ 筋肉, 筋繊維ノ 横斷面ニ就テ觀ルニ, 筋漿ハ一般 ニ淡紅色ヲ呈シ, 筋繊維鞘ノ直下ニ稍々偏在シテ 濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ中等數認ム

糖注入後・ 肝臓・「グリコゲーン」ハ多少増量 ヲ來ス・細葉中心靜脉周圍ニ於ケル中等數ノ肝細 胞原形質内ニ於テ・濃染セル「グリコゲーン」顆粒 ヲ認ム・筋肉・糖注入前ニ比シ「グリコゲーン」量 ノ減少ヲ來セリ・筋漿ハ一般ニ淡紅色ヲ呈スルモ 處<濃染スル處アリ・筋漿中ニ少數ノ微細ナル「グ リコゲーン」顆粒ヲ認ム・

#### 第3例 (39號)

糖注入前・肝臓・肝細葉全般=亙り多數ノ肝細胞原形質内=、稍々粗大ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ多數認ムルモ・血管内被細胞、星芒細胞及ビ 腔管上皮細胞内= 證明セズ・筋肉、筋漿ノ淡紅色 ヲ呈スルモノ多數存在スルモ、「グリコゲーン」顆粒トシテ認メラルルモノ比較的少シ

糖注入後. 肝臓、「グリコゲーン」量ノ増量ヲ 來ス. 肝細葉全體ニ亙リ多數ノ肝細胞原形質内ニ 於テ、濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム. 筋 肉、「グリコゲーン」量減少ヲナス. 筋漿ハ濃淡一 樣ナラズ. 筋漿内ニ稍々平等ニ微細ナル「グリコ ゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第4例 (28號)

糖注入前・ 肝臓, 切片邊線部ニ於ケル肝細葉ハ平等ニ淡紅色ヲ呈シ, 少數ノ肝細胞原形質内ニ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム. 筋肉, 筋繊維ノ横斷面ニ就テ觀ルニ, 筋漿ハー様ニ淡紅色ヲ呈シ, 筋繊維鞘下ニ濃染セル中等數ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

糖注入後. 肝臓,細葉中心靜脉周圍ニ於ケル稍×多數ノ肝細胞原形質內ニ於テ,濃染セル「グリコゲーン」顆粒ノ中等數ヲ認ふ. 血管內被細胞, 陰管上皮細胞,星芒細胞内ニハ「グリコゲーン」顆粒ヲ認メズ. 筋肉,「グリコゲーン」稍々減少ス. 筋繊維ハ平等ニ淡紅色ヲ呈シ,顆粒トシテ認メラルルモノ比較的少シ.

#### 第5例 (25號)

糖注入前 肝臓 切片邊線ニ於ケル少數ノ肝 細胞原形質内ニ於テ、微細ナル「グリコゲーン」顆 粒ヲ認ム 筋肉、筋繊維横斷面ニ就テ觀ルニ、筋 漿ハ淡紅色ヲ呈シ、筋繊維鞘直下ニ於テ偏在スル「グリコゲーン」顆粒ヲ中等數認ム.

糖注入後. 肝臓. 增量ヲ來ス. 肝細葉内ニ於テハ平等ニ淡紅色ヲ呈スル肝細胞多數存在シ, 肝細胞原形質内ニ於テ少數ノ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム. 筋肉、稍々蓄明ナル減少ヲ來ス. 少數ノ筋繊維鞘直下ニ淡染セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ノ極少數ヲ認ム.

#### 第5節 本竜ノ概括

以上行へル質驗成績ヲ概括スレバ次ノ如 シ.

牌鱥剔出後5日ニ糖負荷チナス時,剔出後 ハ剔出前ニ比シ蓍明ナル過血糖/低下抑制チ 認ム.

脾臓剔出後6日ニ糖負荷ヲナス時、肝臓糖原質含有量ハ糖注入前ニ比シ増加ヲナスモ對 照ニ比シ減少ヲ來ス、筋肉糖原質ハ減少ヲ來 スモ對照ニ比シ大差無シ.

組織學的所見ハ化學的ニ檢索セル實驗成績 ト全ク一致ス.

# 第3章 脾臟越幾斯ノ葡萄糖靜脉內 注入後ノ血糖量,肝臟並二 筋肉糖原質量二及ボス影響

#### 第1節 緒 言

脾臓越幾斯ト糖代謝トニ關シ, Togawa 氏 (1920)ハ脾臓越幾斯ハ血糖上昇作用ヲ有ミ, 肝臓糖原質ノ分解ヲ促進スルモノナリト稱セ リ. 反之, Marx 氏 (1930) ハ家兎ニテ 25%葡 荷糖液對 kg 1.6 g ヲ經口的ニ投與シ檢セルニ 脾臓剔出ニョリ低下セル糖「トレランツ」ハ蛋 白ヲ除去セル脾臓越幾斯ノ經口的投與ニョリ 恢復スト報告シ,藤原氏(1932) ハ家兎ニテ 剔脾後糖負荷ヲナス時、過血糖ハ正常家兎ニ 於ケルヨリ常ニ高度ニ發現スルモ,共ノ血糖 上昇ハ脾臓越幾斯及ビ「ヒヨール」酸ノ作用 ニ依り抑制セラレ、兩者ヲ同時ニ作用セシム レバ共ノ程度一層著明ナリト報告シ、立石氏 (1934)ハ家兎ニテ剔脾後上昇セル糖排出閾ハ 脾臓越幾斯或ハ「ヒョール」酸ノ皮下注射ニョ リ正常ニ復スルト述ベタリ.

余ハ脾臓越幾斯ノ正常血糖ニ及ポス影響ニ 就テ檢シ,更ニ脾臓水越幾斯ニテ前處置セル 後葡萄糖液ノ靜脉內注入ヲナシ,血糖量、肝 臓竝ニ筋肉糖原質ノ量的測定ヲ行ヒ,脾臓越 幾斯ノ糖代謝ニ及ポス影響ニ就キ檢索ヲ行ヒ タリ・

## 第2節 實驗材料及ビ實驗方法

實験材料トシテハ第2章第2節ニ記載セルト同様ナルモノニシテ體重5kg乃至9kgノモノヲ使用セリ

牌職越幾斯トシテハ水越幾斯ヲ使用セリ. 先ヅ 1箇ノ脾臓ヨリ抽出セル水越幾斯全量ノ ½, %, ¼ 量ョ正常犬ノ皮下ニ注射ナシ、正常血糖ニ及ボス 脾臓越幾斯ノ影響ニ就テ檢セリ.

次デ前述セルト同様ナル方法ニテ葡萄糖液注入 後ノ各犬固有ノ血糖曲線ヲ決定シ,同一犬ニ數日 ヲ經テ脾臟水越幾斯ノ皮下注射ヲ行ヒ,15分後葡萄糖液ノ靜脉內注入ヲナシ,豫メ決定セル各犬固 有ノ血糖曲線ト比較研究セリ.

肝臓並ニ筋肉糖原質測定ハ準備トシテ40時間 内外ノ経食ヲナサシメ、第2章、第2節ニ記載セルト同様ナル方法ニテ開腹ヲナシ肝臓並ニ筋肉小 片ノ切除ヲ行ヒ、腹膜、筋肉及ビ皮膚ノ縫合後、 脾臓水越幾斯ノ皮下注射ヲナシ、後15分ニ葡萄糖 液ノ靜脉内注入ヲ行ヒ、90分後再ビ開腹シ肝臓及 ビ筋肉小片切除ヲ行ヒ、夫等材料ニ就キ化學的定 量並ニ組織學的檢索ヲ行ヒタリ

#### 脾臓水越幾斯ノ製法

生後6箇月乃至1年ノ健康ナル正常犬ヲ無菌的ニ開腹ナシ・脾臓ヲ切除シ可久的血液ヲ驅除シタル後乳鉢ニ入レ,細斷シ適宜ニ海砂ヲ混ジ入念ニ摺潰シ粥狀トナス・之ニ脾臟重量ノ5倍ノ滅菌蒸餾水ヲ混和シ、電氣振盪器ニテ10時間振盪シ12時間水室内ニ靜置ス・次デ遠心沈澱器ニカケ濕セル濾紙ヲ通ジテ濾過ス・濾液ニ Eisenoxydlösungヲ徐々ニ添加シ蛋白ヲ沈澱セシメ、更ニ「カオリン」ヲ加へ遠心沈澱器ニカケ濾過ス・濾液ハ全ク水様透明トナル・以上ノ處置ハ總テ無菌的ニ行ヒタリ・

## 第3節 實驗成績

- A. 脾臓水越幾斯ノ血糖量ニ及ボス 影響
- 1) 脾臓水越幾斯ノ正常血糖ニ及ボス影響 正常犬ニ1箇ノ脾臓ヨリ抽出セル水越幾斯全量 ノ %、%、¼ 量ヲ皮下注射ナシ次ノ如キ成績ヲ 得タリ.

第 3 表

		1 1 4 63	注入セル	12年10日	Μl	糖	是	(%)	
例	性	體重 (kg)	牌臟水越 幾斯量	注射前後	15′	30'	60'	90'	120′
1	8	6.5	1/2	0.086	0.086	0 079	0.084	0.084	0 087
2	ð	6.0	1/2	0.096	0.096	0.091	0.093	0.093	0.098
3	8	5.5	1/3	0.084	0.071	0 080	0.082	0.080	0.082
4	8	5.6	1/3	0.081	0.077	0.081	0.081	0.081	0.075
5	8	8.5	1/4	0.083	0.083	0.081	0.085	0.083	0.081
6	9	8.0	1/4	0.093	0.091	0.091	0.079	0.079	0.086

52 注射セル第1例, 第2例共ニ30 分ニ於テ輕 度ノ血糖低下ヲ來シ、53注射セル第3例、第4例 90分ニ血糖ノ低下ヲ認ム. ハ15分=テ血糖ノ低下ヲ示ス. 74注射セル第5

例ハ殆ド血糖=變化ヲ認メザルモ第6例ハ60分,

2) 對照試驗

第 4 表

		- / (04 - 54)	注入セル	5 7 5 (1953) 7	m in	糖	量 (%)			
例	性	體重 (kg)	合臨水島	注射前後	15'	30'	60′	90'	120'	
1	٩	6.5	20.0	0 079	0.084	0.082	0.079	0.077	0.082	
2	8	7.8	20.0	0 078	0.084	0.082	0.080	0.079	0.080	
3	P	7.2	30 0	0.085	0.089	0.087	0.087	0.085	0.084	

80 分=輕度ノ血糖上昇ヲ認ムル外著變ナシ.

正常大ニ生理的食鹽水ヲ注入ナシタルニ 15 分. 3) 脾臓水越幾斯ノ葡萄糖液注入後ノ過血糖ニ 及ボス影響

第 5 表

			脾臟水		m		糖		量 (%)	
例	性	體重 (kg)		注射後	15′	30'	45'	60′	90′	120′
		5.6	T.	0.098	0.271	0.152	0.121	0.098	0.096	0.100
1	9	5.8	⅓ F.+T.	0 090	0.202	0.139	0.112	0.090	0 077	0.083
0		6.3	T.	0.084	0.292	0.174	0.090	0.065	0.084	0.086
2	9	6.6	⅓ E.+T.	0.088	0 218	0.123	0.072	0.086	0.086	0.079
9		86	T.	0.086	0 255	0.182	0.154	0.103	0.088	0.084
3	8	8.3	⅓ E.+T.	0.091	0.232	0.154	0.122	0.097	0.090	0.084
4		81	T.	0.076	0.220	0.131	0.086	0.076	0.074	0.076
4	8	8.1	½ E.+T.	0.076	0.201	0.125	0.082	0.069	0 078	0.076
-		9.3	T.	0.090	0.244	0.159	0.098	0.077	0.085	0.083
5	8	9.3	½ E.+T.	0.088	0.200	0.105	0.083	0.090	0.081	0,090

T. ハ葡萄糖ノ略 E. ハ脾臓水越幾斯ノ略 第1例. 脾臓水越浅斯ニテ前處置スル時ハ 糖ノミノ注入時ニ比シ,糖注入後15分ヨリ過血糖 ノ低下促進ヲ來ス. 90分ニ最低血糖 0.077% ヲ示シ,糖ノミ注入セル最低血糖 0.098% ニ比シ著明ナル低下ヲ認ム.

第2例. 脾臓水越護斯ニテ前處置スル時ハ,糖ノミ注入時ニ比シ,糖注入後15分ヨリ過血糖低下促進作用ヲ來ス.過血糖ハ45分ヨリ120分ニ及ビ糖ノミノ注入時ニ比シ長時間持續スルヲ認ム.

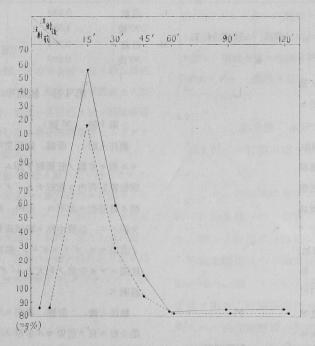
第3例. - 脾臟水越幾斯ニテ前處置スル時ハ, 糖ノミ注入時ニ比シ, 糖注入後15分ヨリ60分ニ 至ルマデ過血糖低下促進ヲ來ス. 寡血糖ハ糖ノミ 注入時=比シ長時=亙ル.

第4例. 軽度ナル過血糖低下促進セルヲ認

第5例. 脾臓水越幾斯ニテ前處置スル時ハ、糖ノミノ注入時ニ 比シ 15 分ヨリ 過血糖低下促進セルヲ認ム. 寡血糖ハ 60 分ヨリ 120 分ニ及ビ糖ノミノ注入時ニ比シ長時ニ亙ル.

以上5例ノ糖注入前後ノ血糖量ヲ平均スレバ次 ノ如シ

		m	血 糖 量 (%)							
5 例平均	注射後注射前	15′	30'	45'	60'	90'	120′			
T.	0.086	0.256	0.159	0.109	0.083	0.085	0.085			
E+T.	0.086	0.216	0.129	0.094	0.082	0.082	0.082			



---· 葡萄糖注射

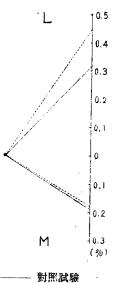
· 脾臟水越幾斯+葡萄糖注射

B. 脾臓水越幾斯ノ糖原質量ニ及ポス影響

第 6 表

例	性	體重 (kg)	肝臓重量 (g)	脾臟水越幾斯			「グリコゲーン」含有率 (%)	±	差 (%)
1				-	l"	直前	0.902		
			105.0			90′後	1.330	+	0.428
36 號	8	6.2	165.0	⅓ E. + T.	M.	直前	0.947		
						90′後	0.764	_	0.183
2					I.	直前	0.253		
	ð	6.5	207,0	½ E. + T.		90′後	0.897	+	0.614
37 號	0	0.5	201,0	- 73 E. + 1.	M.	直前	0 688		
e e						90′後	0.518		0.170
3					J.	直的	0.973		
35	8	9.4	232.0	½ E. + T.		90′後	1.450	+	0.477
35 號 )		0.1	202.0	72 15. 〒 1.	M.	直前	0.570	1	
<u> </u>						90′後	0.400	_	0.172
4					L.	直前	0.205		
$\Omega$	ð	9.6	257.0	½ E. + T.		90′後	0.718	+	0.513
34 號	"	0.0	291.0	/2 13: + 1.	Μ.	直前	0.393		
						90′後	0.202	_	0.191
5.					Ľ.	直前	0.989		,
$\widehat{31}$	Q	5.8	127.0	½ E + T.		90′後	1.587	+	0.598
號	*		12	/3 12. T 1.	M.	直前	0.781		
$\cup$					ļ	90′後	0.589	-	0.192
									-

脚臓水越幾斯及ビ布 萄糖液注入射後=於ケ ル糖原質0.532%(增加) トナリ、之ヲ葡萄糖別 ノミ注入でル時の316%(増加) 肝臓平均0.316%(増加) 二比シ増量ヲ認ム・筋 肉糖原質へ平均0.181 %(減少)トナリ、之ヲ 葡萄糖液質 0.189 %=比シ大差ナシ・



脾臟越幾斯十

葡萄糖注射

第4節 組織學的所見

第1例 (36號)

糖注入前・ 肝臓、肝細葉中心静脈周圍ニ濃染セル稍々多數ノ肝細胞ヲ認ム・其ノ一部ニ於テ肝細胞原形質内ニ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ稍々普遍的ニ證明ス・筋肉、筋繊維ノ橫斷面ニ就テ觀ルニ、筋漿中殊ニ筋繊維鞘ノ直下ニ於テ多數ノ濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム・ 尚ホ筋繊維間ニテモ少數ノ組大ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ證明ス・

糖注入後. 肝臓, 著明ニ増量 ず來セリ. 肝細 葉全般ニ亙リ濃染セル多量ノ「グリコゲーン」顆粒 ヲ以テ充満セラレタル肝細胞ノ多數ヲ認ム. 騰管 上皮細胞, 血管内被細胞内ニハ「グリコゲーン」顆 粒 可認メズ・筋肉、糖注入前ニ比シ稍々減少ス・ 筋漿ハ全般=亙リ淡紅色ヲ呈シ微細ナル「グリコ ゲーン」顆粒ヲ筋漿内ニ證明ス・

#### 第2例 (37號)

糖注入前・ 肝臓・肝細葉中心静脈ノ周圍ニ原 形質ノ淡紅色ヲ呈セル肝細胞群在ス・肝細胞ノ少 數ノモノハ胞體内或ハ胞體邊緣ニ濃染セル少量ノ 「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム・筋肉、筋繊維ノ横斷 面ニ就テ觀ルニ、筋漿就中筋繊維鞘ノ直下ニ濃染 セル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム・

糖注入後. 肝臓、「クリコゲーン」の著明ナル 増量ヲ來ス. Glisson 氏鞘=接スルー部分ヲ除ク 以外ハ、稍々瀰漫性=肝細胞原形質内=濃染セル 「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム. 筋肉、「グリコゲー ン」量稍々減少ス. 筋漿ハ一般=淡紅色ヲ呈シ筋 漿中=濃染セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認 ム.

#### 第3例 (35號)

糖注入前・ 肝臓、肝細葉全般=亙り原形 真内 ニ微細ナル「グリコケーン」顆粒ヲ中等數藏セル肝 細胞ヲ認ム・筋肉、筋漿ハ淡紅色ヲ呈シ筋繊維鞘 直下ノミナラズ中心部=於テ微細濃染セル「グリ コゲーン」顆粒ヲ認ム・

糖注入後. 肝臓,糖注入前=比シ増量ヲナス. 肝細葉全般=亙リ普遍的ニ原形質内ニ濃染セル多量ノ稍や組大ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ以テ充満セル肝細胞ノ多數ヲ認ム. 筋肉、糖注入前=比シ稍や滅少ヲ來セリ. 筋漿ハー般ニ淡紅色ヲ呈シ筋繊維輔直下=偏在セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第4例 (34號)

糖注入前. 肝臓,切片邊線部ノ細葉中心靜尿 ノ周圍ニ於ケル肝細胞原形質内ニ微細ナル「グリ コゲーン」顆粒ノ少數ヲ認ム. 筋肉,筋漿中ニ稍や平等ニ微細濃染セル「グリコゲーン」顆粒少數ヲ認
ム.

糖注入後. 肝臓, 糖注入前ニ比シ增量ヲ來セリ. 肝細葉ノ Glisson 氏鞘ニ接スル部分ヲ除キ稍々普遍的ニ微細ナルデグリコゲーン」顆粒ヲ證明ス. 筋肉, 糖注入前ニ比シ稍々減少ヲナス. 筋漿内ニ普遍的ニ存在スル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ證明ス.

#### 第5例 (31號)

糖注入前・ 肝臓, 肝細葉全體 = 亙り原形質內 = 微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ有ス肝細胞ノ多數ヲ認ム. 筋肉, 筋漿ハ淡紅色ヲ呈シ筋繊維鞘下ニ濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

糖注入後. 肝臓、「グリコゲーン」ハ糖注入前 ニ比シ増量ヲ來セリ肝細葉全般ニ亙リ濃染セル微 細ナル「グリコゲーン」顆粒ノ多量ヲ充滿セル多數 ノ肝細胞ヲ認ム. 筋肉、稍々糖注入前ニ比シ減少 ヲ認ム. 筋漿中殊ニ筋繊維幹直下ニ於テ濃染セル 「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第5節 本章ノ概括

以上行へπ實驗成績ヲ概括スレバ**次**ノ如シ.

正常犬ニ脾臓水越幾斯/注入ヲナス時ハ, 時ニ正常血糖ニ何等影響ヲ及ボサザル事アル モ, 概シテ輕度ナル血糖低下ヲ來ス.

脾臓水越幾斯ニテ前處置シテ後,糖負荷ヲ 行フ時ハ,糖ノミノ注入時ニ比シ過血糖低下 促進ヲ來ス. 肝臓糖原質ハ對照ニ比シ增量ヲ 來スモ,筋肉糖原質ハ對照ニ比シ大差無シ.

組織學的所見ハ化學的ニ檢索セル實驗成績 ト全ク一致ス.

# 第4章 脾臓ニ存在スル迷走神經刺 蚊素=就テ

# 第1節 緒 言

近時内分泌ニ關スル研究隆盛トナリ脾臓モ
亦「ホルモン」ヲ分泌シ,脾臓越幾斯中ニ該
「ホルモン」ヲ含有スルト信ズルモノ多キニ至
レリ.然レドモ脾臓<sup>\*</sup>ホルモン」ノ本態ニ關シ
テハ未ダ不明ノ域ヲ脱セズ・

Kokas 氏 (1926) ハ脾臓「ホルモン」ハ 水,「アルコホル」,「エーテル」ニ可溶性ニシテ50℃ノ熱ニ耐フルトナシ,得能氏 (1931) ハ脾臓水越幾斯中ニハ脾臓「ホルモン」ヲ含有シ,該物質ハ水ニ浸出シ「アルコホル」ニ可溶性ニシテ,熱ニ對シ相當抵抗力强ク,動物膜ヲ透折セズト稱シ,朴氏 (1931) ハ脾臓越幾斯ノ有效成分ハ水,「アルコホル」,「アセトン」ニ可溶性目耐熱性ニシテ 100℃ ニ 30 分加熱スルモ破壊セラレザル物質ナリト述べ,田中屋氏(1932)ハ脾臓越幾斯ノ本態ハ脾臓内特殊

内分泌物質ニシテ,水,「アルコホル」,「エーテル」,「アセトン」等ニ浸出スル事ヲ得ルト 報告セリ.

余ハ前章ニ於テ正常犬ニ牌臟越幾斯注射後糖負荷ヲナス時、糖ノミノ注入時ニ比シ過血糖リ低下促進竝ニ肝臟糖原質ノ増量ヲ招來セリ. 此實驗成績ハカツテ余が「ピロカルピン」ニテ迷走神經刺戟後糖負荷セル實驗成績(岡山醫學會雜誌第46年11號参照)ニ略ボ一致ス. 此實驗結果ョリ余ハ牌職越幾斯中ニ迷走神經刺戟素ノ存在ヲ豫想シ、之ガ本態ニ就キ次ノ如ク檢索ヲ企テタリ.

# 第2節 實驗方法

#### A. 化學的檢索

第3章第2節ニテ記載セル方法ニテ牌麣越幾斯ヲ製シ,之ヲ50°Сニテ蒸發セシメ極メテ少量トナリシ殘餘液ニ,「メチール,アルコホル」ヲ加フレバ白濁ス、白色沈澱物ヲ濾過シ此濾液ニ約5倍量ノ「アセトン」ヲ加フレバ沈澱物ヲ生ズ、之ヲ更ニ



Stanek 氏試藥ニヨル結晶 Zeiss Ok. K. 7, Obj. 10, KL. 40 cm

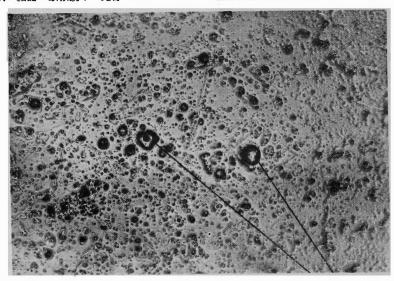
濾過シ再ビ低溫ニテ蒸發セシメ眞空乾燥装置ニ貯 蔵セリ、檢査時無水「アハコホル」ニ溶解シ使用セ リ.

# 1) Stanek 氏試藥

脾臟越幾斯ノ無水「アルコホル」溶液ヲ載物硝子ニ塗布シ乾燥後、Stanek 氏試藥ヲ滴下セバ、暫時ニシテ針狀ノ結晶ヲ顯微鏡下ニ見得ベシ.

#### 2) 鹽化白金

牌臟越幾斯ノ無水「アルコホル」溶液ニ鹽化白金「アルコホル」飽和溶液ノ敷滴ヲ加へ敷時間放置ス、後之ヲ濾過シ殘渣ヲ蒸鰡水ニ溶解シ、之ヲ水溶内ニテ蒸發シ極メテ少量トナリシ液ヲ冷却シ、載物硝子ニ塗布後乾燥スレバ顯微鏡下ニ黃色6角立方體狀ノ結晶ヲ見得ベシ・



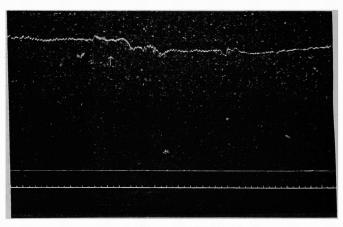
鹽化白金ニョル結晶 Zeiss Ok. K. 7, Obj. 10, KL. 40 cm

#### B. 生理學的檢索

第3章第2節二於テ記載セハ方法 ニヨリ製セル脾臓越幾斯ヲ低溫ニ テ蒸發シ脾臓1箇ヲ約20.0ccニ濃 縮セシモノヲ使用セリ.

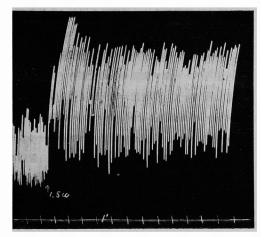
1) 家兎血壓=關スル實驗 家兎頸動脉ニテ血壓ヲ測定セルニ、脾臓水越幾斯 1.0 cc ノ耳殻靜 脉内注入ニヨリ明カニ之ヲ下降セ シムルヲ得タリ

 家兎ノ小腸ニ及ボス影響 Magnus 氏法ニヨリ、<u>リンガー</u>、 ロック氏液ニテ保生セル家兎ノ剔



家 兎 血壓 ニ 對 ス ル 脾 滅 越 幾 斯 ノ 作 用 脾 蹴 越 幾 斯 用 量 1.0 cc 注 射 時 標 3 秒

出小腸片ニ脾臓越幾斯 1.5 cc ヲ作用セシメタルニ、 蠕動亢奮ト筋緊張度ノ昻進トヲ認メ得タリ.



家 死腸片 = 對スル脾臓 越幾斯ノ作用 <u>リンガー</u>, <u>ロック</u> 氏液 50.0 œ 温度 39°C 時標 1 分 用量 1.5 cc

以上ノ結晶學的,生理學的檢索結果ハ,余ガ對 照トシテ使用セルMerck製鹽酸「ヒョリン」ト全ク 相一致ス.

第3節 本章ノ概括竝ニ考察

牌職越幾斯ョリ Stanek 氏試藥ニョリ針狀ノ結晶ヲ,鹽化白金ニョリ黄色 6 角立方體狀ノ結晶ヲ得タリ.更ニ牌職越幾斯ノ静脉內注入ニョリ家鬼ノ血壓ヲ低下セシメ,又家鬼ノ剔出腸片ニ作用セシメ蠕動亢進ト筋緊張度ノ昻進ヲ認メタリ.「ヒョリン」ノ結晶化學的檢索ニハ Stanek 氏試藥及ビ鹽化白金ハ最モ鋭敏ニシテ,余ノ得タル結晶ハ對照トシテ使用セル Merk 製鹽酸「ヒョリン」ト全ク一致ス.「ヒョリン」ハ之ヲ静脉內注入スル時ハ血壓ヲ下降スル作用アリ.Halliburton 氏 (1905) ハ本作用ハ内職血管擴張ノ結果二次的ニ起ルモノトナシ,Müller 氏ハ心臓内血液ノ鬱滯竝ニ

四肢、腸管、腎臓、大腦等諸臓器ノ血管擴張ニ歸セリ、 Hunt u. Taveau 氏等ハ猫ニテ「アセチール、ヒョリン」ノ少量注射ニテ數秒間ノ血壓ノ下降ヲ實驗シ,尾崎氏ハ少量ノ「ヒョリン」ハ單ニー過性ノ血壓下降作用ノミ有スレドモ、適當量ニテハ先ゾ血壓ヲ下降セシメ次デ反對ニ上昇セシメ更ニ再ビ下降セシムルモノナリト云ヘリ.

「ヒョリン」ノ腸片ニ對スル作用ニ就テMüller氏ハ猫ノ小腸ニテ實驗セル結果,筋緊張ノ著シク亢進スルヲ認メ,該作用ハAuerback 氏神經叢或ハ夫レョリ末梢部ニ及ブモノナラント推定シ, Kühlwein 氏ハ實驗的ニ腸蠕動ノ亢進スルヲ述ベ,新片氏ハ人工的ニ惹起セシメタル腹膜炎時ニ於ケル腸管麻痺ハ「ヒョリン」ノ應用ニョリ恢復スルヲ證明シ, Löffer u. Guggenheim 氏,Dale 氏,Le Heux 氏等諸氏ハ,「アセチール,ヒョリン」ハ小腸ニ對シ興奮的ニ作用スルモノナリト報告セリ. 脾臟越幾斯ノ血壓並ニ腸管ニ及ボス作用ハ「ヒョリン」ノ夫レト相一致スルヲ認ム.

余ハ脾臓越幾斯ョリ得タル結晶ハ對照トシテ用ヒタル Merck 製鹽酸「ヒョリン」ト全ク同様ニシテ、尚ホ之ヲ確證センガ爲家兎血壓並ニ腸管ニ就テ檢索セルニ、其ノ作用ハ鹽酸「ヒョリン」ト相一致セリ.

# 第5章 鹽酸「ヒヨリン」ノ葡萄糖静 脉内注入後ノ過血糖,肝臓 並二筋肉糖原質量ニ及ボス 影響

第1節 緒 言

Gürber 氏(1891)ハ副腎ニハ血壓ニ對シ上。

昇ヲ來ス物質ノ他ニ下降ヲ來ス物質アルヲ報 ジ, Kutscher 氏ハ血壓下降物質ヲ副腎ョリ化 學的ニ抽出分離シ, 次デ Lohmann 氏 (1907) ハ生理學的作用ヲ研究シ、其ノ物質ハ副腎皮 質ニ多量ニ含有スル「ヒヨリン けル事ヲ確認 シ、之ガ「アドレナリン」ト拮抗的作用アルラ 提唱セリ.「ヒョリン」ノ血糖ニ及ポス影響ニ 就テ觀ルニ, Frank u. Isaak 氏等ハ「ヒョリ ン」ハ「アドレナリン」過血糖ニ何等ノ影響ヲ 及ボサズト述べ、Borstein 氏及ビ Vogel 氏 ハ犬ニ,櫻井氏ハ家兎ニ「ヒョリン ロ 皮下注 射ヲナシ過血糖ノ惹起スルヲ報ジ. 西田氏ハ 「ヒヨリン」ノー定量ヲ家兎ノ皮下ニ注射ス ル時ハ必ズ輕度ノ過血糖ヲ招來スルト述ベタ リ. 反之 Dresel 氏及ビ Zemmin 氏等ハ健康 人竝ニ糖尿病患者ニ就キ「ヒョリン レ 皮下注 射後血糖減少スルヲ認メ,清松氏ハ家兎ニテ 「ヒョリン」ハ正常血糖ヲ低下セズ又「アドレ ナリン」過血糖ニ對シ何等抑制作用無シト報 告セリ.「ヒョリン」ノ血糖二及ボス影響ニ就 キ記載セル文獻少シトセズ,然レドモ「ヒヨリ ン」ニテ迷走神經刺戟後糖負荷ヲナシ過血糖 ノ消長肝臓並ニ筋肉糖原ニ關スル文獻ナシ.

余ハ前章ニテ脾臟越幾斯中ニ迷走神經刺戟 素ヲ含有シ,迷走神經刺戟素ハ「ヒヨリン」様 物質ナルヲ確證セリ.然ラバ「ヒヨリン」ハ糖 代謝ニ對シ如何ナル影響ヲ及ポスカヲ知ラン ガ爲久ノ如キ檢索ヲ行ヒタリ.

#### 第2節 實驗材料及它實驗方法

實驗材料トシテ第2章第2節ニ記載セルト同様 ナルモノヲ使用セリ.

**鹽酸「ヒョリン」對 kg 1.0 mg, 3.0 mg, 5.0 mg** 

ノ皮下注射ヲナシ正常血糖ニ及ボス鹽酸「ヒヨリ ン」ノ影響ニ就テ檢セリ. 次デ前述セルト同様ナ ル方法ニテ葡萄糖液注入後ノ各犬固有ノ血糖曲線 ヲ決定シ,同一犬ニ數日ヲ經テ鹽酸「ヒヨリン」對 kg30 mg ノ皮下注射ヲ行ヒ、15 分後葡萄糖液靜 豚内注入ヲナシ豫メ決定セル各大固有ノ血糖曲線 ト比較研究セリ、肝臓並ニ筋肉糖原質ノ測定ハ準 備トシテ40時間內外ノ絕食ヲナサシメ,第2章第 2 節ニ記載セルト同様ナル方法ニテ 開腹ヲナシ, 一定部分ヨリ肝臓並ニ筋肉小片切除ヲ行ヒ、腹膜・ 筋肉及ビ皮膚ノ縫合後、 鹽酸「ヒヨリン」對 kg 3.0 mg ノ皮下注射ヲナシ, 後 15 分ニ葡萄糖液ノ 翻版內注入ヲ行ヒ、 90 分後再ピ開腹シー定部分 ョリ肝臓及ビ筋肉小片切除ヲナシ、夫等材料ニ就 キ化學的定量並ニ組織學的檢索ヲ行ヒタリ. 鹽酸 「ヒョリン」ハ Merck 製ニシテ1%ノ水溶液トナシ 使用セリ.

#### 第3節 實驗成績

- A. 鹽酸「ヒョリン」/ 血糖量ニ及ボ ス影響
- 1) 正常犬ニ圞酸「ヒヨリン」對 kg 1.0 mg, 3.0 mg, 5.0 mg / 皮下注射ヲナシ次ノ如キ成績ヲ得タリ(第7表参照).
- a) 鹽酸「ヒヨリン」對 kg 1.0 mg 注射. 第1例, 第2例共ニ殆ド血糖ニ變化ヲ認メズ.
- b) 鹽酸「ヒョリン」對 kg 3.0 mg 注射. 第 3 例へ 60 分, 90 分, 120 分=, 第 4 例へ 30 分, 60 分, 120 分=, 第 5 例へ 15 分, 30 分, 90 分, 120 分= 輕度ナル血糖量ノ低下ヲ來ス.
- c) 鹽酸「ヒョリン」對 kg 5.0 mg 注射. 第6例へ30分,60分,90分,120分=輕度ナル血糖量ノ減少ヲ來スモ,第7例,第8例ハ共ニ血糖ニ殆ド變化ヲ認メズ.

第	77	-4-
<b>73</b> .	- 7	表

i.			對 kg 藥物量 (mg)		Ú11	糖		量 (%)	)
例	性	體 重 (kg)		注射後	15′	30′	60′	90'	120′
1	8	80	1.0	0.088	0.092	0.086	0.081	0.088	0.087
2 :::	δ	5.8	1.0	0.086	0.088	0.090	0.086	0.086	0.086
3	δ	5.9	3.0	0.108	0.108	0 113	0.106	0.104	0.101
4	ę	5.9	3.0	0.082	0.082	0.075	0.079	0.087	0.079
5	ð	6.6	3.0	0.098	0.081	0.082	0.098	0.082	0.089
6	8	68	5.0	0.088	0.088	0.074	0.083	0.070	0.072
7	우	6.8	5.0	0 094	0.091	0.094	0.095	0.085	0.087
8	우	6.7	5.0	0.098	0.098	0.098	0.089	0.093	0.102

# 2) 鹽酸[ヒョリン]ノ葡萄液注入後ノ過血糖ニ及ボス影響

#### 第 8 表

				ıtı		糖		量	(%)	
例	性	體 重 (kg)	對 kg 藥物量 (mg)	注射被	15′	30′	45′	60′	90′	120′
		6.6	T.	0.094	0.195	0.107	0.094	0.098	0.096	0.093
1	8	6.7	Cholin $3.0 + T$ .	0.088	0.178	0.099	0.082	0.078	0.080	0.080
_		5.8	T.	0.088	0.273	0.164	0.089	0.086	0.088	0.089
2	ð	5.7	Choiin 3.0 + T.	0.091	0.207	0.103	0.081	0.093	0.086	0.083
3		8.5	T.	0.096	0.224	0.157	0.130	0.096	0.093	0.100
3	8	8.6	Cholin 3.0 + T.	0.102	0.159	0.089	0.095	0.100	0.098	0.093
		7.0	T.	0.094	0.228	0.137	0.093	0 088	0.094	0.093
4	ð	7.0	Cholin 3.0 + T.	0.086	0.183	0.129	0.085	0.078	0.086	0.092
5		6.6	T.	0.082	0.217	0.096	0.084	0.082	0.081	0.093
.	5   8	6.5	Cholin 3.0 + T.	0.085	0 217	0.128	0.080	0.078	0.080	0.078

第1例. 鹽酸「ヒョリン」ニテ前處置スル時 ハ,糖ノミノ注入時ニ比シ糖注入後 15 分ヨリ過血 糖ノ低下促進ヲ來シ,過血糖ニ次デ來ル寡血糖ハ 45 分ヨリ 120 分ノ長時ニ亙ルヲ認ム.

第2例. 鹽酸「ヒョリン」」ノ皮下注射後糖質 荷ヲナス時、糖ノミノ注入時ニ比シ 15 分ヨリ過血 糖ノ低下促進ヲ來シ、糖ノミ注入スル時 60 分ニ來 ル寡血糖ハ、鹽酸「ヒヨリン」ニテ前處置スル時 45

#### 分ニ發來ス.

第3例. 鹽酸『ヒョリン』ニテ制處置セル後 葡萄糖液ノ注入ヲナス時ハ. 糖ノミノ注入時ニ比シ糖注入後15分ヨリ過血糖ノ低下促進ヲ來シ,寡 血糖ハ糖ノミノ注入時ニ比シ速ニ發來シ其ノ持續 時間長時ニ亙ルヲ認ム.

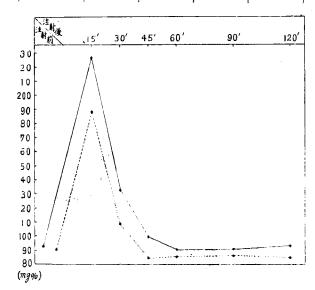
第4例. 鹽酸「ヒョリン」ノ皮下注射後糖員 荷ヲナス時ハ, 糖ノミノ注入時ニ比シ 15 分乃至 45 分間ニ於テ 輕度ナル過血糖ノ低下促 進ヲ來ス モ, 其ノ後ハ血糖ニ差異ヲ認メズ.

第5例. 鹽酸「ヒョリン」注射後糖資荷ヲナス時ハ.糖ノミノ注入時ニ比シ15分ニテハ差異無ク、30分ニテハ寧ロ血糖ノ上昇ヲ來ス. 糖ノミ注

入スル時 60 分=發現スル寡血糖ハ、鹽酸「ヒヨリン」ニテ前處置スル時ハ45 分ニテ發來シ、其ノ持續長時ニ互ルヲ認ム.

以上5例ノ糖注入前後ノ血糖量ヲ平均スレバ次 表ノ如シ

	ıπ			<u>*************************************</u>	量 (%)		
5 例 平 均	注射後 注射前	15′	30 <b>′</b>	45′	60′	90′	120′
T.	0.092	0.227	0.132	0.099	0.090	0.090	0.093
Cholin $3.0 + T$ .	0.090	0.188	0.109	0.084	0.085	0.086	0.085



• 葡萄糖注射

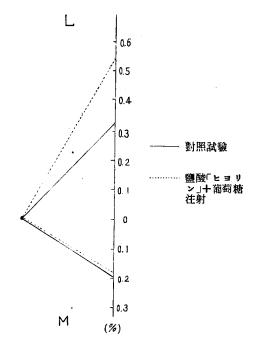
・・・・・・・ 鹽酸「ヒヨリン」 + 葡萄糖注射

B. 鹽酸「ヒョリン」/糖原質量ニ及ポス影響

例	性	體 重 (kg)	肝臓重量 (g)	對 kg 藥物量 (mg)			「グリコゲーン」含有率 (%)	±	差 (%)
1 70 號	P	6.3	235.0	Cholin 3.0 + T.	l <b>M.</b>	直前 90′後 直前 90′後	2.152 2.801 0.480 0.300	+	0.649
2 71 號	P	4.2	165.0	Cholin 3.0 + T.	I M.	直的 90′後 直前 90′後	0.456 0.906 0.312 0.128	+	0.450

例	性	體 重 (kg)	肝臓重量 (g)	對 kg 藥物量 (mg)			 「グリコゲーン」含有率 (%)	±	差 (%)
3 (72 號)					I	直前 90′後	0.640 0.965	+	0.325
	7.0	155.0	Cholin 3.0 + T.	M.	直前 90′後	0.341 0.164	·_	0.177	
4 (74)號)	ę	7.6	215.0	Cholin 3.0 + T.	ſ M.	直前 90′後 直前 90′後	0.192 0.590 0.483 0.298	+	0.398
5		Cholin 3.0 + T.	ſ.	直前 90′後	0.712 0.130		0.418		
(75 號)	•	,			M.	直前 90 <b>′後</b>	0.795 0.621	_	0.174

鹽酸「ヒョリン」及ビ葡萄糖液注入前後=於ケル糖原質含有率差ハ、肝臓平均0.448%(増加)トナリ之ヲ葡萄糖ノミ注入セル對無試験ノ肝臓平均0.316%(増加)=比シ増量ヲ認ム. 筋肉糖原質ハ平均0.180%(減少)トナリ,之ヲ葡萄糖ノミ注入セル時ノ筋肉糖原質0.189%(減少)=比シ大差無シ.



第4節 組織學的所見

#### 第1例 (70號)

糖注入前・ 肝臓・肝細葉ノ中心帶ニ近ク瀰漫性ニ存在スル肝細胞原形質内ニ於テ、比較的微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ中等數認ム・筋肉、筋繊維ノ横斷面ニ就テ觀ルニ、筋漿ハ淡紅色ヲ呈シ、筋繊維鞘ノ直下ニ於テ濃染セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ中等數認ム・

糖注入後. 肝臓、糖原質ハ糖注入前ニ比シ增量ヲ來セリ. 肝細葉中心帶ニ近ク瀰漫性ニ存在スル肝細胞ハ,多數ノ小空胞ヲ生ジ泡沫狀ニ現ハル.「グリコゲーン」顆粒ハ「カルミン」ニ比較的好染スルモ顆粒ノ輪廓不明瞭ナリ. 筋肉、糖注入前ニ比シ減量ヲ來セリ. 筋漿ハ一般ニ淡紅色ヲ呈シ, 筋繊維鞘直下ニ極メテ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第2例 (71號)

糖注入前 肝臓 原形質内1側=於テ濃染セル「グリコゲーン」顆粒ヲ有ス肝細胞、細葉内處やニ存在ス. 筋肉、筋漿ハー般ニ淡紅色ヲ呈ス. 筋繊維ノ1側邊緣ニ於テ少數ノ微細濃染セル「グリ

コゲーン」顆粒ヲ認ム.

糖注入後. 肝臓,糖原質ハ糖注入前ニ比シ増量ヲ來セリ. 原形質内ニ稍々平等ニ中等大ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ有ス肝細胞ヲ細葉内處々ニ於テ認ム. 筋肉,糖注入前ニ比シ糖原質ハ減量ヲ來セリ. 少數ノ筋繊維1 側邊緣ニ於テ少數ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第3例 (72號)

糖注入前・肝臓・肝細胞原形質内1側=於テ 濃染セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒アリ・膽管 上皮細胞・血管内被細胞=テハ之ヲ認メズ・筋肉、 多數ノ筋繊維ハ瀰漫性=淡紅色ヲ呈シ、筋繊維ノ 1 側=於テ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ノ少數ヲ 認ム

糖注入後. 肝臓 糖原質の糖注入前ニ比シ増量ヲ來セリ. 原形質内ニ於テ中等大ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ有ス稍々多數ノ肝細胞. 細葉内ニ存在ス. 筋肉, 糖原質の糖注入前ニ比シ減量ヲ來セリ. 筋漿ハー般ニ淡紅色ヲ呈シ少數ノ筋繊維ノ 1側ニ於テ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ少數認

#### 第4例 (74號)

糖注入前. 肝臓,切片ノ邊縁ニ於テ少數ノ微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ有スル肝細胞ヲ認ム. 筋肉,筋漿ハ淡紅色ヲ呈シ,各筋繊維ニ於テ筋繊維輔直下ニ濃染セル微細ナル「グリコゲーン」 顆粒ノ多數ヲ認ム.

糖注入後. 肝臓,糖原質ハ糖注入前ニ比シ增量ヲ來セリ. 濃染セル微細ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ有スル肝細胞ヲ細葉内ニ於テ散在性ヲ認ム. 筋肉,糖注入前ニ此シ減量ヲナス. 筋漿ハ淡紅色ヲ呈シ,筋繊維鞘ノ直下ニ濃染セル微細ナル「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第5例 (75號)

糖注入前・ 肝臓・肝細葉中心帶ニ於テ濃染セル中等大ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ有スル肝細胞ノ多數ヲ認ム・星芒細胞・膽管上皮細胞・血管内被細胞ニハ「グリコゲーン」顆粒ヲ認メズ・筋肉、筋漿ハ濃染シ筋繊維輸直下ニ偏在セル多數ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム・

糖注入後. 肝臓・糖原質ハ糖注入前ニ比シ增量ヲ來セリ・濃染セル中等大ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ有スル肝細胞ノ多數ヲ細葉内ニ認ム・筋肉、糖注入前ニ比シ減量セリ・筋漿ハ濃染シ纞テノ筋繊維ニ於テ偏在セル多數ノ「グリコゲーン」顆粒ヲ認ム.

#### 第5節 本章ノ概括

以上行へル實驗成績ヲ概括スレバ次ノ如 シ

正常犬ニ鹽酸「ヒョリン」對 kg 1.0 mg, 3.0 mg, 5.0 mg ノ注射ヲナス時ハ時ニ血糖上昇ヲナス事アルモ,一般ニ輕度ナル血糖ノ低下ヲ來ス.

鹽酸「ヒョリン」注射後糖負荷ヲナス時ハ, 糖ノミ注入時ニ比シ過血糖ノ低下促進ヲ來シ,且寡血糖ノ持續長時ニ亙ルヲ認ム. 肝臓糖原質ハ對照ニ比シ增量ヲ來スモ,筋肉糖原質ハ對照ニ比シ大差無シ.

組織學的所見ハ化學的ニ檢索セル實驗成績 ト全ク一致ス.

## 第6章 總括及ビ考案

脾臓剔出後,糖代謝ニ就テ,山田氏ハ家兎ニテ剔脾前後ニ於テ,葡萄糖液,静脉內注入ラナシタルニ,脾臟ノ存否ハ過血糖ノ消長ニ對シ何等影響無シト述ベシモ, Marino 氏ハ

犬, 野間氏, 村尾氏, 藤原氏等ハ家鬼ニテ, 剔脾後ハ正常時ニ比シ過血糖ノ曲線ハ高ク且 持續時間ノ長時ニ亙ルヲ報ジ, 尚ホ村尾氏, 野間氏等ハ剔脾後ハ肝臓糖原生成ノ減少ヲ報 告セリ.

余ハ健康犬ニテ剔脾後5日乃至6日ニ糖負荷ヲナシ檢シタルニ、剔脾後ハ正常時ニ比シ過血糖ノ低下抑制ヲナシ、肝臓糖原質ハ對照ニ比シ減量ヲ來シ、筋肉糖原質ハ對照ニ比シ大差無キ成績ヲ得タリ(第2章,第3節参照). 野間、村尾、藤原、Marino等諸氏ノ報告セル如ク、余モ亦脾臓剔出後ハ糖同化機能ニ對シ抑制的作用アルヲ確證セリ.

脾臓越幾斯ノ糖代謝ニ及ボス影響ニ關シテ ハ, 未ず諸家ニョル實驗成績ノ一致ヲ見ズ. Bouisset 氏, Rouzaud u. Soula 氏(1930)等 ハ家兎ニ脾臓越幾斯ヲ注射スル時,血糖ノ上 昇ト糖尿トヲ惹起スルモ犬ニテハ何等作用ヲ 認メズト述べ,厂川氏ハ家兎ニテ牌臓越幾斯 ハ血糖上昇ヲ來ミ且肝臓糖原質ノ分解ヲ促進 スルモノナリト報告セリ. 反之 Marx 氏ハ動 物試驗ニテ剔脾後ノ糖「トレランツ」ノ低下 ハ,脾臓越幾斯ノ投與ニヨリ抑制スルヲ實驗 シ、尚ホ糖尿病患者ノ食餌性過血糖ハ脾臟越 幾斯ニヨリ著明ニ抑制サルルヲ確證シ,藤原 氏ハ家兎ニテ牌臓越幾斯ニョリ剔牌後ノ糖同 化機能ノ低下ハ著明ニ恢復スルヲ述べ、立石 氏ハ家鬼ニテ剔脾後上昇セル糖排出閾ハ,脾 臓越幾斯ノ應用ニ依リ正常ニ復スルヲ報告セ y.

余ハ正常犬ニ蛋白ヲ除去セル脾臟越幾斯ノ 注射ヲナス時,正常血糖ニ對シ何等影響ヲ及 ボサザル事アルモ概シテ輕度ナル血糖低下ヲ 招來シ、脾臟越幾斯注射後糖負荷ラナス時ハ、 過血糖ノ低下促進ラナシ、肝臟糖原質ハ對照 ニ比シ增量ヲ來スモ、筋肉糖原質ハ對照ニ比 シ大差無キ成績ヲ得タリ(第3章、第3節參 照). Marx 氏、藤原氏、立石氏等ノ報告セル 如ク余ノ實驗ニ於テモ、脾臟越幾斯ハ糖代謝 ニ對シ促進的作用ヲ有スルヲ確證セリ.

脾臟越幾斯中ニアル種 / 「ホルモン」 尹含有 スルハ現今多數 / 學者ニョリ信ゼラルル所ナ リ.

脾臓「ホルモンリ本能ニ就キ, Mazzanti 氏 ハ脾臓「ホルモン」ハ腐敗ニ依り其ノ作用ノ増 强スルヲ觀テ「ヒスタミン」及ど「ヒヨリン」様 ノ化學的物質ナラント推定シ, 得能氏ハ水, 「アルコホル」、朴氏ハ水、「アルコホル」、「ア セトン」, Kokas 氏ハ水,「アルコホル」,「エ ーテル」、田中屋氏ハ水、「アルコホル」、「エ ーテル」、「アセトン」等ニ可溶性ニシテ且耐 熱性(朴,得能,田中屋)ノ物質ナリトシ、 Tangel u. Farkas 氏等小網狀織內皮細胞系 統ヲ刺戟スル物質ナラントセリ.脾臓「ホルモ ン」ノ本態ハ諸家ノ研究ニヨリ漸次闡明サル ルニ至リシモ, 尚ホ詳細ナル記載ヲ缺キ依然 トシテ木ダ不明ノ域ヲ脱セズ. 脾臟越幾斯ノ 血糖、肝臓竝ニ筋肉糖原質ニ及ボス影響ニ就 キ考察スル時,其ノ實驗結果ハ「ピロカルピ ン」ニテ迷走神經刺戟後糖負荷セル實驗成績 ト略ボー致セルヲ知ル(岡山醫學會雜誌 46年 11 號參照). 此結果ヨリ余ハ脾臟越幾斯中ニ 迷走神經刺戟素/存在ヲ豫想シ, 之ガ檢索ヲ ナシタルニ, 迷走神經刺戟素ハ「ヒョリン 様 物質ナル事ヲ確證セリ. 卽チ脾臓越幾斯ヨリ Stanek 氏試藥ニ依り針狀ノ結晶ヲ,鹽化白金 ニョリ6角立方體狀ノ結晶ヲ得,更ニ脾臓越 幾斯ヲ家鬼耳殼靜脉ニ注入シテ血壓ノ下降ヲ 惹起シ,家鬼腸管ニ作用セシメ腸蠕動ノ亢奮 ト筋緊張度ノ昻進トヲ招來セリ.而シテ之が 「ヒョリン」様物質ナル事ハ,石山教授が嘗テ 膽囊ョリ浸出セラレタル「ヒョリン」様物質 ト全々相等シク,且余が對照トシテ使用セル Merck 製鹽酸「ヒョリン」ト全ク一致スルヲ以 テ明カナリ・

「ヒヨリン」ノ糖代謝ニ及ボス影響ニ就テ観ルニ,正常犬ニ鹽酸「ヒヨリン」對 kg 1.0 mg, 3.0 mg, 5.0 mg ノ皮下注射ニヨリ血糖ノ上昇ラ來スコトアルモ一般ニ輕度ナル血糖ノ低下ヲ來シ,鹽酸「ヒヨリン」對 kg 3.0 mg 注射後糖負荷ラナス時ハ,葡萄糖液ノミノ注入時ニ比シ過血糖ノ低下促進ト寡血糖ノ持續時間ノ延長トラ來シ,肝臓糖原質ハ對照ニ比シ增量ラナスモ,筋肉糖原質ハ對照ニ比シ大差無キ成績ラ得タリ(第5章,第3節参照). 即チ鹽酸「ヒヨリン」ノ糖代謝ニ及ボス影響ハ其ノ實驗結果ニ於テ脾職越幾斯ト相一致セルラ知ル.

以是觀之脾臟ハ「ホルモン」トシテ「ヒョリン」様物質ヲ含有シ,之が含水炭素新陳代謝ニ對シ促進的作用ヲ及ポスー要素ナリト確信ス.

#### 第7章 結論

1) 脾臟剔出 糖注入後ノ過血糖ノ低下 緩漫ナリ・肝臟糖原ハ對照ニ比シ減少ヲ來ス モ筋肉糖原ハ對照ニ比シ大差ナシ・肝臓並ニ 筋肉糖原質ノ組織學的所見ハ化學的ニ檢索セ ル實驗成績ト一致ス.

- 2) 脾臟越幾斯注射 糖注入後ノ過血糖 ノ低下促進ヲ來ス. 肝臟糖原質ハ對照ニ比シ 增量ヲ來スモ筋肉糖原質ハ對照ニ比シ量的差 異無シ. 肝臟竝ニ筋肉糖原質ノ組織學的所見 ハ化學的ニ檢索セル實驗成績ト一致ス.
- 3) 鹽酸 ヒョリン」注射 注射葡萄糖液 注入後ノ過血糖ノ低下ヲ促進ス・肝臓糖原質 ハ對照ニ比シ増量ヲ來ス・筋肉糖原質ハ對照 ニ比シ量的差異ヲ認メラレズ・肝臓竝ニ筋肉 糖原質ノ組織學的所見ハ化學的ニ檢索セル實 驗成績ト一致ス・
- 4) 脾臟越幾斯中ニ「ヒヨリン」様物質ヲ含 有シ,之が糖代謝ニ對シ促進的ニ作用ス.

擱筆スルニ臨 ミ恩師石山教授ノ御懇篤ナル 御指導並ニ嚴正ナル御校関ニ對シ深甚ナル感 謝ノ意ヲ捧グ.

#### 熄 文

1) A. V. Marx, klin. Wschr., Nr. 44, 1930. 2) Abderhalden u. Müller, Ztschr. f. physiol. chem., Bd. 65, 1910. 3) Dienerstein u. Geness, Z. ges. exp. med., Bd. 65, 1929. 4) Dold 11. Kodama, Ztschr. f. Inn. forsch., Bd. 13, 1913. 5) E. Lauda, W. kl. Wschr., Nr. 32, 1932. 6) E. Lauda, Die normale u. pathol. physiol. d. milz., 1933. 7) Flaum 11, Schlesinger, W. Arch. inn. med., Bd. 23, 1932. 8) Fuziwara, Bioch. Ztschr., Bd. 256, 1932. 9) Gold u. Schnizzler, Arch. f. kli. chir., Bd. 140, 1926. 10) H. Altenburg-Basel, Biochemisches Handlexikon. 11) Heppe u. Schliephake, Z. ges. exp. med., Bd. 78, 1931. 12) Ichikawa, Ztsch. f. Inn. forsch., Bd. 13, 1913. 13) Kinoshita, pfl. Arch., Bd. 132, 1910. [4] Lohmann, pfl.

Arch. f. d. physiol., Bd. 118, 1907. 15) Mark, M. med. Wschr., 1929. 16) Stanek, Hoppe-Seyler's Ztschr. f. physiol, chem., Bd. 46, 1905. 17) Tanaka, Bioch. Ztschr., Bd. 37, 1911. 18) Tateishi, Journ. of Biochem., Vol. 19, No. 3, 1934. 19) Togawa, Bioch. Ztschr., Bd. 109, 1920. 20) 石山, 三宅教授在職20週年 紀念祝賀論文集. 21) 井倉, 日本內分泌學會 雜誌,第3卷,昭和2年. 22) 清松, 大阪醫學會 雜誌, 第26卷, 第1號, 昭和2年1月. 23) 小林, 實驗藥物學雜誌, 第4卷, 第4號, 昭和6年12月. 24) 小室, 日本內分泌學會雜誌, 第4卷, 第1號, 昭和3年4月. 25) 松岡, 日本內分泌學會雜誌, 第5卷, 第2號, 第8號, 昭和4年5月, 11月. 26) 村

尾, 日本內分泌學會雜誌, 第5卷, 第11號, 昭和5年 2月, 第6卷, 第4號, 第8號, 昭和5年7月, 11月. 27) 西田, 戍醫學會雜誌,第5卷,第1號,大正15年2月. 28) 野間, 日本內科學會雜誌, 第14卷, 第3號, 大正15年6月. 29) 野間, 岡圏雑,第441號,第 442號, 大正15年10月, 11月, 第443號, 昭和元年 30) 大野、福岡醫學會雜誌,第20卷,第 9號. 31) 田中屋, 岡醫維, 第44年, 第8號, 昭和 7年8月. 32) 德田, 實驗消化器病學雜誌,第4卷, 第2號, 昭和4年5月. 33) 得能, 日本外科學會 雜誌, 第32囘, 第1號, 昭和6年4月... 34) 等地, 福岡醫學會雜誌,第20卷,第6號. 35) 山田、社 會醫學會雜誌,第539號,昭和6年12月.